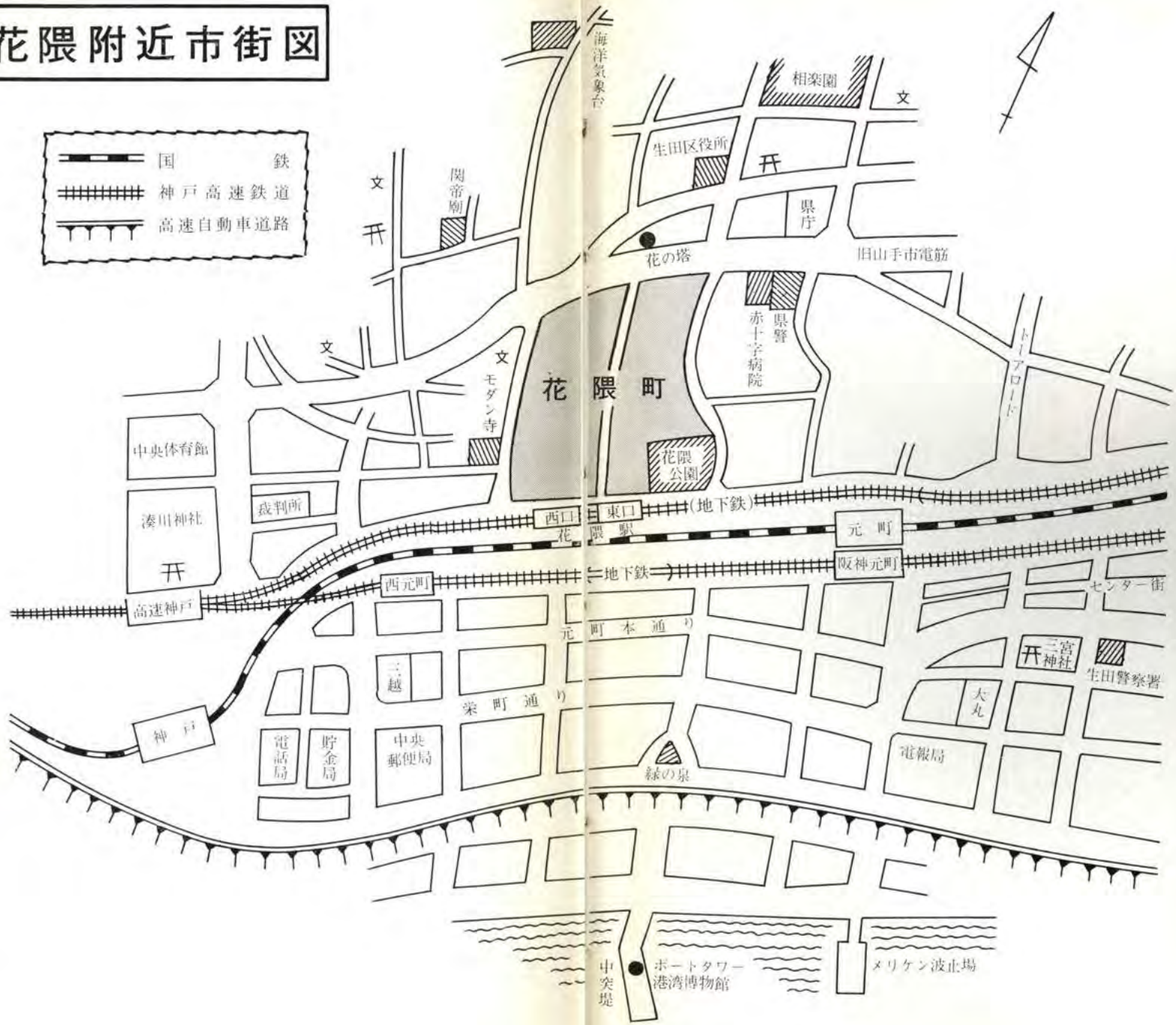
花隈

花

隈

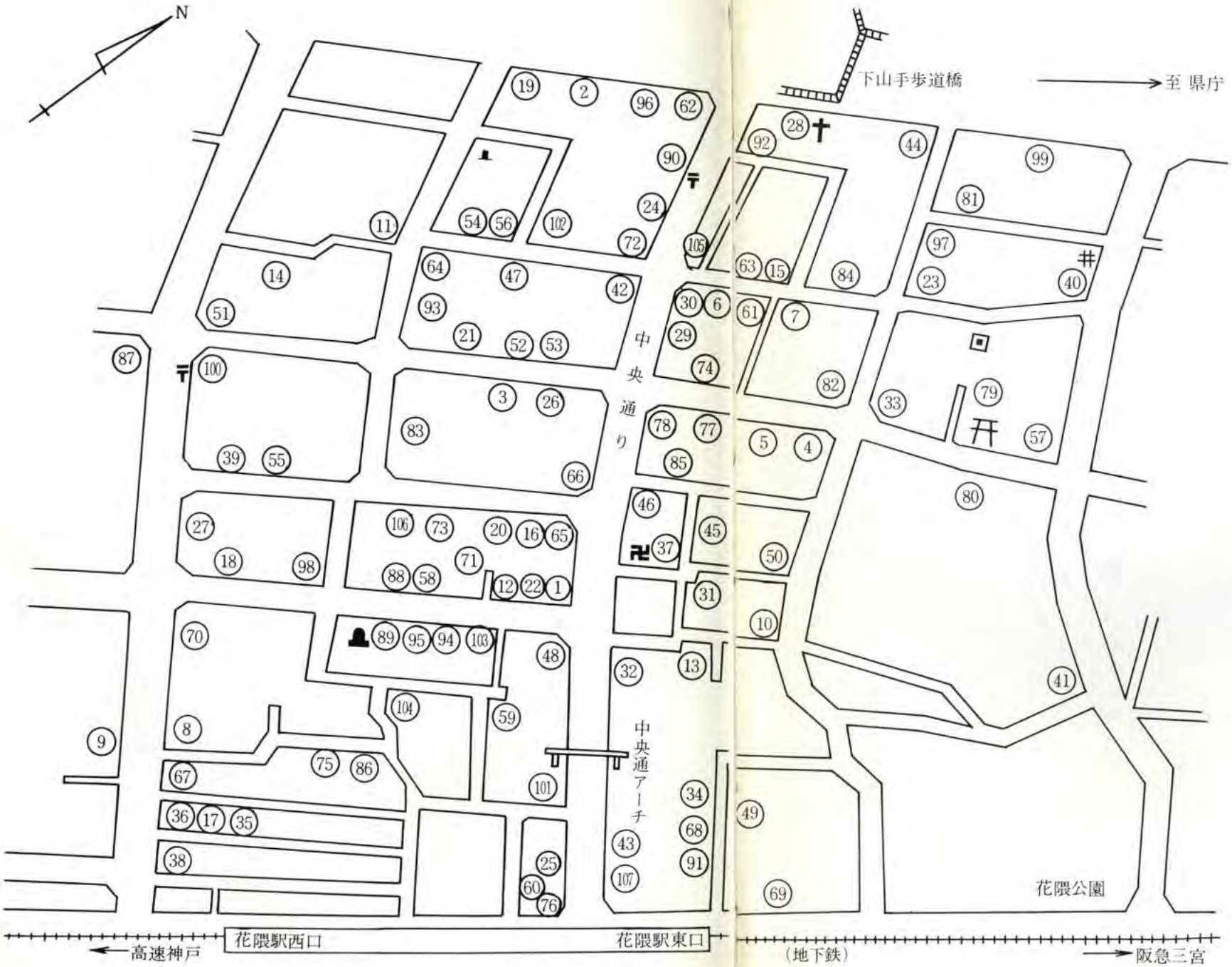
花隈附近市街図


国鉄
神戸高速鉄道
高速自動車道路
海洋気象台
相楽園
文
生田区役所
開
県庁
関帝廟
花の塔
旧山手市電筋
県警
赤十字病院
トーアロード
モダン寺
花隈町
花隈公園
中央体育館
裁判所
湊川神社
西口
東口
(地下鉄)
花隈駅
元町
阪神元町
地下鉄
西元町
高速神戸
センター街
元町本通り
三宮神社
生田警察署
三越
大丸
栄町通り
神戸
電話局
貯金局
中央郵便局
緑の泉
電報局
中突堤
ポートタワー
港湾博物館
メリケン波止場

花隈町附近見取図

アラビア数字は新興会員所在地を示す
会員氏名、業種等本書末尾会員名簿をごらん下さい

▣ 新興会事務所
▲ 村上画伯宅地趾碑
卍 福徳寺（天主閣趾碑）
井 東郷井
▲ 金山画伯記念碑
日 厳島神社



海上
花隈中央通り
キクマサ 菊正宗 キクマサ

花隈中央通よりポートタワーを望む

〈花隈風景〉

花隈芸妓の出勤風景

古風な建物が町内のあちこちに見られ、庭もムードをもり上げている。

善福寺・通称モダン寺（七丁目）

下は花隈から見る神戸港
ポートタワーがま下に見える

花隈福徳寺山門に建っている天主閣趾の記念碑

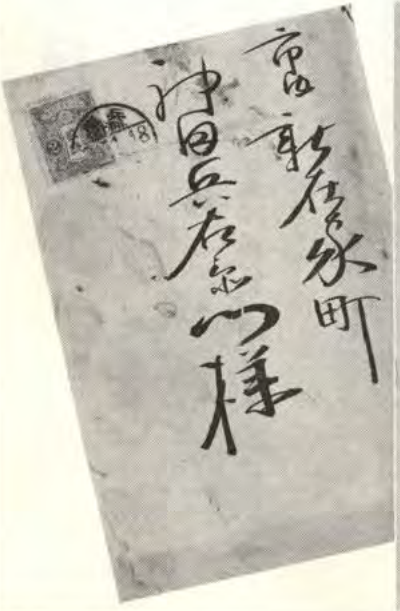
花隈城の鬼門だった相楽園の樟（神戸の名木）

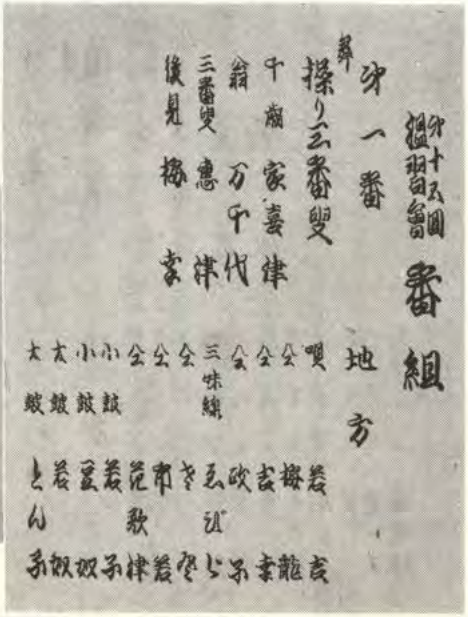
この樟は今から約四百年のむかし、永禄十年（一五五八）に花隈城が築城された時、鬼門よけのために荒木村重が植えたものだと伝えられている—神戸緑化協会提供

明治維新前15年ぐらいと推定される神戸村落図（山手小学校蔵）

山手のオアシス〝花の塔〟（彫刻家新谷秀雄さん作）

新中検芸妓の秋季温習会番組…大正３年11月20日―23日聚楽館で。





御挨拶

花隈新興会々長　浜野吉男

戦後、国内各地で一しきり城廓再現ブームが興った事は既に衆知の通りであります。

今から四〇〇年余、昔に遡上って永禄年間――今私達が朝夕起居しているこの処に花隈城があり、僅か数年にして城主荒木一族は大阪石山本願寺攻めのいきさつから主君織田信長の手の者に攻め亡ぼされ、婦女子二五〇名余が共に悲惨な最後を遂げたという一連の悲話は余りにも有名であります。

私如き者が歴史をさかのぼって尋ねる是非は別として、神戸市民の心ある方々に依り「花隈城」再現の説が他都市と同じように一頃論議され、花隈住民の一部にも大いなる関心を呼び起され、或は実現かと胸をときめかせたのでありますが、御覧の通り往時「本丸の跡」と伝えられる個所は一昨四四年三月末日を以って市営モータープールとなり、その夢も泡と消えたのであります。

文中にもありますように外壁こそ城の形態を幾分残されているものの、せめて角ヤグラの一つでもという望みを今もって捨て切れない気持を残しているのは、あに私一人では無いと思います。

城再現の一ばんの障害は「花隈城」を偲ぶ何物もなく、僅かに攻手であった備前の池田方に地割表があるだけという事を伝え聞いております。

然し何とかしても更に資料を集め、いつかは再建したいという気持と、資料皆無の場合の城の再現は半ばあきらめの気持が輻輳しておりますが、せめて現時点においては皆様の心の中に城の姿を築きたいと念願しての現れが一昨年の落城物故者四〇〇年忌大法要であり、今回の誌「花隈」の発刊であります。

吾が花隈はちっぽけな町ではありますが前述の花隈城の事や、神戸開港に一役買った花街の事、現在活躍している自治活動、更に発展を期すべく活動している新興会等の他、町に誇るべき事業が次々と計画され実施に移されております。

こうしたいろいろの花隈の出来事や思い出を綴って郷土誌を作ろうという事になったわけであります。

俗に素人の向う見ずと言われますが、その通りで余り慾ばりすぎて決して自慢の出来るものでない事は百千承知でありますが、せめて御投稿下さった諸先生方の玉稿に助けられ、また、このつたない私達の企てが五〇年・一〇〇年の後に何かの風物を残すよすがにでもなれば望外の喜びであります。

本誌発刊の運びに至りますまで、温いお手をさしのべて下さいました諸先生方各位に、心より感謝の意を表し、御挨拶と致します。

推薦のことば

神戸市長　宮崎辰雄

この度「花隈」が発行されるにあたり、心からお祝い申し上げます。

これまでいろいろな書物が神戸を語り、神戸を紹介しておりますが「花隈」はこの町の人々自身によって、町の移り変りが綴られた貴重な記録です。

四百余年前の幻の城といわれている「花隈城」も今では公園と駐車場となり、市民の憩いの場となっております。

一方昔ながらの伝統ある町並も現存しており、古いものと新しいものとが調和する風雅な一面のうかがえるのも、この花隈の町です。

花隈新興会の手によって、出来上ったこの書物には、この町で生まれ育った人々の対話があり、類書に見られない生き生きとした町の鼓動を聞く思いがします。

この書物が花隈を知り、神戸を愛する市民に広く親しまれることを願ってやみません。

貴重な存在

金井元彦
（前兵庫県知事）

花隈といえば、古くから一流の芸どころとして知られ、神戸第一の花街の名声をほしいままにしてきた。私は、戦後の花隈しか知らないが、戦災から復興したこの町には、やはり昔の面影を偲ばせるものがあり、上品な花街のムードが継承されている。

近ごろのはげしい時代のうつりかわりとともに、伝統あるこの町も次第に変貌してきたようだ。しかし、わが国の社会環境や生活の様相が急速にアメリカナイズされつつあるとき、日本独特の情緒を感じさせる花隈は、まことに貴重な存在であると思う。

静かなたたずまい、やさしい人情、そういった〝花隈のよさ〟をいつまでも持ち続けて、その雰囲気に愛着を抱く多くの人びとのために自愛してもらいたいと、ひそかに願っている。

「花隈」目次

題字　兵庫県知事　坂井　時忠

御　挨　拶……花隈新興会々長　浜野　吉男…14
推薦のことば……神戸市長　宮崎　辰雄…16
貴重な存在……前兵庫県知事　金井　元彦…17
厳島神社……楢崎伊津夫…30
花岡山禅定院・福徳寺略縁起……酒井　立順…33
日本キリスト教団神戸教会……児玉浩次郎…34
史　荒木摂津守村重……荒尾　親成…36
夢かなった？新生「花隈城」……40
花隈落城四〇〇年忌……浜野　吉男…43
表　白……46
因縁の深きを今更に……福田　とよ…47
花隈城跡から出土した石塔るい……川辺　賢武…50
史　①　花　隈……酒井　立順…52
②　花隈古今物語
③　昔花隈に小学校あり
花隈花柳界誕生記……荒尾　親成…56
花隈附近市街図……2
花隈町附近見取図……4
花隈風景（カラー）……7
花隈のあるところ……20
躍進中の現在の花隈……21
花隈自治会の活躍……25
新興会管理駐車場……26
神戸の新名所「花隈公園」……28
天主閣之趾記念碑建立……49
花隈で遊んだら……60
日本最初の活動写真……61
座談会「蘇生花隈城の春の色」……62
花隈夜ばなし……84
料亭の移り変り……97
芸　妓……114
神戸市　章……121
市民の花「あじさい」……122

「ドン山」懐古……木内　勇…68
花隈の人　長駒姐さん……72
村上華岳画伯……74
金山平三画伯……77
東郷井と長籔水路……森川　しず…78
幼いときの花隈……小林　通男…81
下山手歩道橋……中川　善文…88
花隈未来像……吉川　晴嵐…90
太平洋戦争中の花隈……堀　太三郎…92
村上華岳先生の思い出……豊沢スミエ…95
当時の物価……藤本　啓蔵…96
遠くにありて思う花隈……野川　清子…98
住みよい町です……福島　薫…99
文学雑誌「はなくま」抄……今井やす子…100
☆短歌　☆俳句　☆川柳
戯曲「夕やけ雲」……原作・近藤　頼一…102
花隈に住みたい……吉川　一雄…116
明治初年神戸事件……落合　重信…118
三宮今昔……明治　老人…120
新作「神戸音頭」作詞について……福田　とよ…140
町名物語り……川辺　賢武…142
みなとこうべの観光地……123
1、神戸港　2、都心あちら、こちら
3、ショッピング　4、美術館めぐり
5、神社　6、仏閣　7、須磨・舞子
8、山　9、有馬温泉　10、市内観光バス
神戸市民の歌……134
好きな町　みなと祭の歌　花隈音頭
月の輪おどり　ラメチャンタラ…
なつかしのメロディー……138
神戸市民の歌　神戸行進曲　マダム神戸
花隈名物「盆おどり」……140
町内商業分布……143
花隈新興会々員名簿……144
花隈芸妓名簿……151
花隈のお店プロフィル……152
花隈新興会役員名簿……164
おとがき……177
編輯委員……178

花隈のあるところ

現在の生田区は面積僅か八・四平方キロメートル、全市域の約一・五%にすぎず市内八区の内一番に狭い区であるが、神戸港によってふちどられた海岸線と緑の山に包まれ神戸市の中央に位置し、わが国第一を誇る貿易港の大半を占め県庁・市役所・裁判所・法務局・海運局・税関・海洋気象台など五十余の主要官公署をはじめ三十余の各国領事館・三百余の諸会社、またショッピングセンターや歓楽街があり、名実共に神戸市の行政・貿易・商業の心臓部として日々躍進をつづけている。

その生田区の中心に花隈がある（2頁市街図参照）

花隈の町内とその近くの著名な場所を掲げよう。

町内	花隈公園・花隈駐車場・神戸高速鉄道花隈駅・旧花隈城天守閣趾碑・旧花隈城趾碑・福徳寺・厳島神社・東郷井・北向地蔵尊・村上華岳画伯宅趾碑・金山平三画伯記念碑
東	県庁・県警・赤十字病院・繊維問屋街・国鉄元町駅・阪神元町駅・メリケン波止場・大丸・三宮センター街
西	モダン寺・神戸中央体育館・裁判所・湊川神社・三越・国鉄神戸駅（東海道本線・山陽本線分岐点）
南	瀬戸内海航路発着場（中突堤）・ポートタワー・海洋博物館・ショッピングセンター元町通・神戸高速鉄道西元町駅・中央郵便局
北	生田区役所・行政監察庁・相楽園・関帝廟・海洋気象台・花の塔・諏訪山公園・ジョセフ彦の碑

※掲載著名場所へは花隈町からいずれも徒歩五分～一〇分です。

躍進中の現在の花隈

花隈は神戸市の中央生田区の、そのまた生田区の中央に位している。

街そのものが中心にあり、交通至便で市内著名な場所へは数分で簡単に行けるほんとうに便利なところである。

明治初年花街として形成され官吏貿易商の、また大正・昭和戦前には船成金というように多数の著名人の憩いの場所として日本全国でも知れわたっていた有数な花柳街であったが大東亜戦争後時代の流れと共に町内のその形態も逐次変貌され、花柳街中心から都心の住宅区域となって来た感があり、しっとりとした明るい町になっている。

それでも夜ともなれば昔なつかしい料亭からは絃歌さんざめく、なまめかしいフンイキをも持っている変った町でもある。

町内をあげて自治活動が活発で、県・市・警察・防犯・消防・保健所等、各関係官庁からその成績の優秀さから再三に亘って表彰を受けている。

現在の自治活動の構成は母体に花隈自治会があり、本誌を発刊した花隈新興会は自治会内の有志が自治会で活動出来ない町の発展に寄与すべく出来たもので、その構成も一部を除き全役員の殆どが自治会と新興会の兼任となっている。

町内の区域としては、花隈町全域・下山手通六丁目、旧山手市電線浜側・北長狭通六丁目で、町民四五〇世帯・人口二、一〇〇名の九九%が自治会の会員となり、全員を挙げ

ての愛町精神のもと、次のような活動をしている。

町内の史蹟を正しく保存する

花隈城趾・花隈城天守閣趾地・東郷元帥愛用の東郷井・日本画壇の巨匠村上華岳画伯・金山平三画伯の生誕地・宅跡・史蹟文献の保存。

明るい街運動（神戸市）に協力して

中央大通りにアーチの建設・同じく中央大通りに水銀の街路灯十六基・町の要所要所に防犯灯三十六灯また各家庭に協力を求めて各軒灯の常夜点灯等々、街の隅々まで明るい。

花一杯みどりの街造り（神戸市）に協力して

街路樹として柳を中央通り・東通り・柳筋に、花隈駅東入口には街頭花壇・町民への花の種子・苗の無償分配、その他各料亭・マンション・アパートの庭木が大きく育成され、街のそぞろ歩きにも花や緑が楽しめる。

町の環境整備について

役員一同の献身的奉仕と全会員の熱意ある協力は当局を動かし、他の町内に先きがけて

町内各道路の完全舗装・水洗便所の完備・下水道の改修等が一〇〇％達成されている。

防犯支部も結成され、年末その他必要なときには特別警戒に当ったり、隣近所のスクラムを組んだ防犯ベルも逐次普及され、殆ど犯罪は発生していない。

消防団も活躍しているが、幸いこの人達の用事がない位、平穏無事な日常を営んでいる。

町内の清掃に至っては全市に先きがけ、いち早くポリバケツの定日収集に踏みきり、完全なる実施は市清掃局より生田区のモデル地域に指定されているのをみてもうなづける。

衛生方面は前述のゴミ処理一〇〇％清掃の他、毎月常傭人夫を雇い溝・下水の掃除、道路わき・空地等の雑草とりを行ない、また保健所の協力を求め薬剤の町内散布をなし、また各家庭へは乳剤・ネズミ取り薬の無償配給を行なう等をして、現在では町内に蠅・蚊・ネズミの殆どは見られなくなっている。

また年一回町民の健康診断を実施している。

交通関係についても

交通委員制度があり、当局よりも指導員の委嘱を受け、当局に協力して毎月の交通安全の日の交通立番・春秋二回の

全国安全交通旬間には全日程の奉仕をなし、その他町民その他の歩行者の安全のため中央大通りに歩道の建設を当局に具申、立派に出来上っている。

この歩道には青々とした街路樹の柳があり、真夏には涼しい木陰を作り出し、夜は水銀灯が明々と照らし、ほんとうに理想的な歩道である。

また山手地区との安全交通のため、これまた当局を動かし立派な歩道橋が出来、歩行者が山手幹線道路の自動車の流れを少しも心配する事なく往来出来ることで歩行者から非常に喜ばれている。

この歩道橋の中央下には花壇と噴水があり、朝夕の散策にも喜ばれている事は勿論、山手幹線の眺望や夕陽の眺めなど、花隈の一名所とも考えられるものである。

また町内の不法駐車や道路不正使用を無くするため、地主の好意に依る空地を借用し、新興会管理に依る駐車場三カ所も建設、町内の道路がすっきりしている。その他注意摘発等の活発な活動を行なっている。

町内の親睦にも力を入れ、文化部を設け、自治会・新興会の総会では食事を共にしながら町の建設意見の交換やら、十八番の芸披露等を行ない、お年寄には敬老会、子供たちには地蔵盆・盆おどり、全員には納涼大会・防犯映画の夕・町内鎮座の厳島神社春秋の祭礼に奉仕協賛、有志による一泊旅行等々、他の町では見られない行事をいつも楽しく行なっている。

庶務関係では関係官庁よりの通知通報事項や町内の出来事・啓蒙事項等を全会員に周知さすべく町内会報を発行し、全員に配布するのは勿論、関係官庁へも送っている。

以上自治活動でなすべき事はすべて包含し、町内役員一同の献身的な奉仕は勿論、人的・物的その他ありとあらゆる事に対し会員全員の強力な協力があり、兎に角神戸全市

に自慢出来る吾が花隈ではある。

昔数十軒を数えた料亭も現在では二十五軒足らずにはなったが、堅実な営業で古風なお座敷遊びが楽しめるとあって繁昌している。

料亭を転業された方々も五階、六階のマンション・アパートを建てられ、前述した如く市内中心の住宅街といってよい程人口密度も年々ふえて来ている。

高速神戸鉄道の開通で町内に花隈駅が出来た事により新しい意味での花隈がクローズアップされ、その上町内の明るさ・楽しさ・便利さ等々が加わり、都心の住宅街として大きくのびるのもあと僅かな時間の問題といえよう。

上記のような事で各商店も活気があり、米・酒・食品・喫茶・理髪・美容・浴場・薬局・医院等々、日常生活にはかかせない商売はすべて揃っており、町民が心から住み心地満点を謳歌している次第である。

商売について大きく言えば、ゆりかごから墓場（?）まで揃っている街である。

（商業分布一四三頁参照）

防犯標語

一億が法を守って暴力追放

防犯はまずとなり近所が手をつなぎ

「出かけます」必ずかけよう声とかぎ。

◁花隈公園より兵庫県庁を見る。県庁の左手の山は市章山といかり山である。

花隈自治会の活躍

花隈自治会は太平洋戦争後、有志の方々が相集まり町内の自治活動に入られたのでありますが、年を追う毎に会員数がふえ全町民の殆どが入会されて現在に至りました。

自治会の活躍は前述「躍進中の現在の花隈」の項で網羅しておりますので、ここで改めて記載致しません。

ただ創立より今日に至るまでの昔風に言えば町のために滅私奉公を下さった歴代会長の方々と、十五年以上御奉仕頂いた役員の方々並びに現役員の御芳名を掲載させて頂き御労苦に報ゆる一端にさせて頂きます。

歴代会長

初代　新居　東
二代目　富士井　太郎
三代目　奈良崎　健蔵
四代目　安藤　潔
現在　浜野　吉男

現在の役員

会長　◎浜野　吉男
副会長(会長代理)吉川　一雄
同　(渉外部長)◎中川　善文
同　(文化部長)◎朝田　正一
会計部長　◎芳地　音次
衛生部長　◎今井　良三
防災部長　◎福島　薫
理事　向井　三郎
同　竹中八三郎
同　松岡　従陽
同　西川　常夫
同　中津川義朗
同　南　平
同　◎小林　健佐
同　豊沢　政一

理事　大平　祐三
同　徳島　得夫
同　前田ふじ子
同　村井　和子
同　大塚こつる
同　島谷　豊子
監査　藤本　啓蔵
同　秋谷　繁雄
参与　杉島　弘道
同　三輪潤次郎
顧問　奈良崎健蔵
同　清水　小富
同　安藤　潔
同　山野井信雄

☆氏名の上に◎印のついていられる方々は既に十五年以上も連続、尚今日も現役の役員として奉仕されている方々であります。

新興会管理駐車場

私有地の空地を借りて…

＝地主も無償で協力＝

吾が新興会は交通事故の原因になる路上駐車を追放しようと「どうせ雑草のはえるにまかせている土地なら利用されるときまで無償で借り受け、町内の路上駐車を追放しよう」と計画し、空地三ヵ所を借り地域の駐車場を作った。

この駐車場造りは町内一帯に青空駐車が目立ちはじめ附近住民の間から「家の前に車が止められて不便、その上交通事故の原因にもなる」と苦情が出はじめたことから、生田署交通課はこれまでに同地区の主要道路の大半を「駐車禁止地区」にしたが、車は禁止地区を避けて狭い路地裏にのさばりはじめた。

このため新興会の役員一同が相談した結果、町内のあちこちにある「空地」に目をつけ、自己防衛のためにも地域社会のためにもと地主に協力を求めて駐車場に借用することにしたのである。

この申し込みを受けた地主の方も草を生やして使わずにいるのはもったいない、その上地域団体になら必要となった時にはトラブルもなく返して貰えるという安心感もある上、みんなに喜んで貰えるものならと快諾、話はトントン拍子で進んだ。

駐車場は新興会の管理として役員が世話をし、会員を優先的に使用させる事にして、余地ある場所を町内・近隣の人々に利用してもらい、町内の道路はすっきりしてきた。

尚あと二、三ヵ所ある空地も駐車場に利用すべく地主と交渉中である。

使用料は月四千円、一般私営の月一万円以上に比べると格安の使用料で、「青空駐車」の罰金一回の五千円からみても安いもの。新興会ではこの使用料を地主の好意に対する謝礼として返し、地主に喜ばれると共に駐車場を利用している人々にも便利になった、駐車に心配がなくなったと好評である。

浜野会長は「交通禍といわれる時代にあまりにも駐車場

が少ない。その半面利用されていない空地が案外と多い。地主の理解さえあればこれ程役に立つことはない」と六月二十三日から三日間、東京都で開かれた「全国地区組織指導者研修会」に神戸市から選ばれて出席した席上で、全国各地のリーダーに「花隈方式」の駐車場造りを紹介、大きい反響を呼んだ。

これを聞いた市内各地区の自治団体もこのアイデアにすっかり感心し、地区毎にどしどし駐車場を造ろうと運動を開始している。

神戸市内はおろか、日本全国にも誇り得る花隈方式の駐車場である。

御協力を頂いている地主さんの住所・氏名は次の通り

・生田区北長狭通六丁目十一ノ一　杉原　光

・東灘区御影城の前一四五四ノ一　岡西武夫

スピードはそんばかり

交通事故の多い時代になって危険極まりない。自動車もゆっくり走ってはといつも思う。

アメリカのある科学研究所で、一六〇〇㌔のコースを、一台の車は時速四〇㌔、ほかの一台は時速一〇〇㌔で走らせた。すると一〇〇㌔の車は四〇㌔の車よりもガソリンを六〇%、オイルを八倍近く使いタイヤも七倍よけいにすりへった。

スピートを出せばこの上事故のきけんも多くなるのだ。スピートを出してとくな事は一つもないという事になる。

交通安全標語

のんだらのるな。のるならのむな
かっとする心の動きが事故のもと
なぜ急ぐ事故につながるその運転
あげた手ににっこり笑って待つゆとり。

神戸の新名所 花隈公園

幻の城跡とは言いながらも厳然として残っていた花隈城跡が、永年の間いろいろ利用されてはきたものの、終戦後は全く荒れるにまかされていたのである。

途中、昭和二九年頃、市当局の手で若干補修されたものの、相変らず草ぼうぼう、蛇がいる、イタチが出ると荒城の月ではないが訪れる人とてなく、史跡とは言いながら無用の物と化していた観があった。

時代の流れは全国的な交通戦争で御多分に洩れず神戸の街でも自動車の洪水となり、駐車は道路わきの青空駐車、せまい道路、どんどんふえる自動車に駐車場の増設がさけばれ出してきた。

このときに当り市当局が城跡に二八〇台を収容出来るモータープールを建設しようということになり、地元の意見も汲み入れ、城跡のイメージを残せるよう外壁は城の石垣を再現する様式の近代的なモータープールが出来たわけである。

モータープールの屋上には市民「憩の場所」として花隈公園に衣替え、四季の花・緑の木々・散歩道・噴水・滝・ベンチ・子供の遊戯施設等々、至れり尽くせりの近代公園が出来上った。

池田公の筆になる「花隈城趾」の碑と緑におおわれた花隈公園

神戸のどまん中、四季とりどりの草花・緑にかこまれて休憩すると、その目の前にはポートタワーがそびえ神戸港が一目に見える。後ろを向けば市章山・錨山・再度山と緑したたる六甲山系の背山が迫ってくる。

日暮れともなれば帰路をいそぐサラリーマンのアベック、中年夫婦のカップル、町内の子供達等々利用者の多い賑やかな公園になった。

公園内には「花隈城趾・公爵池田宣政」の記念碑、市当局に依る史跡の概要をきざみ込んだ碑も出来て、かすかながらも花隈城跡として残されている。

大げさな言い方だが東海道線の車窓からも全景がはっきり見られるので、全国の旅行者の目を楽しませてくれるに違いない。

兎に角吾が花隈地域内にこんな立派な公園が出来たのである。ただ残念なのは花隈公園という名称であって、なぜ花隈城趾公園としてくれなかったのかと返す返すも残念である。

（編　集　部）

厳島神社

前宮司　楢崎伊津夫

社　名　厳島神社
鎮座地　神戸市生田区花隈町七
境内坪数　五一八一平方米（一五七坪）
祭　神　市杵島姫命
　　大物主命　崇徳天皇
摂　社　稲荷神社　一宇
　　出雲神社　一宇
　　地　神社　一宇

由緒沿革

平清盛が勧請した兵庫七弁天の一つと称され花隈の地に鎮座されていたのを、永禄年間に荒木元清が築城するに際し、社地が城の廓内になるので他（今の北長狭通六丁目と元町通四丁目との中間にあったとの言い伝えがある）にお移しし、爾来屢々社地の移動があり、降って天明年間当神社の崇敬家橋本藤左衛門が宇治川尻に築港した時、その鎮守の社として移斎し、旧二ッ茶屋村の氏神社とされた。

これが神戸市最初の最古の港なのである。（慶応四年の地図にも記載され、その風景の一部は「神戸古今の姿」という本にも載っている）

明治十三年五月村社に列せられ、明治十五年に金刀比羅宮の社殿を厳島神社本殿と相並べて奉建し二社殿を以て港湾・船舶・航海の守護神として博く知られ、その後神社附近の今の栄町一帯が花柳界として賑わうや厳島神社を弁天さんと称する処から技芸の守り神として厚く信仰され、それが後の花隈花街との関係が深くなったのである。

戦前の神社附近の旧花柳界の紅がらぬりの細格子入り造りの家屋は、旅館その他に転業して栄町六丁目から元町六丁目（三越東側）を通ずる細道に昔をしのばせながら残っていたが、戦災にて焼失した。

大正五年六月九日、神饌幣帛供進社に指定され、昭和三年二月、臨港鉄道敷設のため、境内地が敷地となるの故を以って栄町通六丁目に移転したが、昭和二十年三月十六日の深夜から十七日早暁にかけて米軍の空襲により悉く炎上し、同年十月に兵庫県の委嘱による株式会社中島組が仮本殿を建設したが、昭和二十三年三月十四日、神戸中央郵便

局拡張のために社地及び社有地を買収の旨申越あり、そこで花隈城趾丘上に逓信省の診療所跡地があったのを、社地との交換を申し込んだ処、本省でも承諾したとの事であった。

そこで更に神戸市役所に都市計画との関係を問合せると、公園予定地であるが由緒ある神社であるから建ててもよいと承諾を得たのであるが、当時は万事進駐軍の監視下にあり、それを恐れて承諾文書を発行せず、これでは後日役人の係の変更・転任のあった際紛糾せんとも限らず、証拠となるものがないからやむなく往古由縁の花隈に地を選び、現在の場所に移転したのである。

昭和三十九年八月に社殿改築の工事を開始し、本殿・幣殿・拝殿・摂社三宇・鳥居・石玉垣・参道・境内常夜灯十二基を新設し、手水盤も新設、社務所の一部を改造し、昭和四十年六月一日正遷宮祭執行、同年十月九日竣工祝祭を執行し、景観全く一変し現在に至っている。

現在の崇敬者の区域も広く花隈は勿論、元町四・五丁目北長狭通六丁目、栄町通四・五丁目、海岸通り、下山手通六丁目の一部に跨り、夏祭には神輿を出し区域内の神幸式を行ない、秋祭には社内にて催物を行ない賑わっている。

文中、昭和三十九年八月社殿改築の際には、現在の自治会・新興会の役員の方々の御協力に負う処が多く、その御寄進と御奉仕は鳥居・石玉垣等にその名をきざみ永久に残されている。

往時の特別崇敬者及び戦前の思い出

二ツ茶屋村は廻船・酒造で栄え、中でも橋本藤左衛門は楠公一族の末裔で木屋を号し富豪を以って勢力があり花隈の村上五郎兵衛を援けて再度山中に猩々池を造り旱害を除き、また学者との交友も多く、国学者鈴木重胤をも養った網屋吉兵衛、高浜家も船持ちとして著名で、代々昭和終

戦まで総代或は世話役を勤めた。網屋吉兵衛は城田吉兵衛と称し、昭和十年まで今の元町通五丁目浜側に住んでいた。今でも昭和三年五月二十八日付で神社の某件について署名した文書が残っている。

橋本藤左衛門の別荘は今の北長狭通六丁目花隈駅東口近くにあって、後、伊藤博文が寓居していた事もある。その後吟松亭となってそこの主人が旧縁により当神社の役員を勤めていた。

専崎弥五平は二ツ茶屋城下町に生まれ、弁天浜に邸を構え、かの七卿落ちもここで船を仕立てて送ったのである。彼は当神社に特別の崇敬を以って土地等を献納している。

都会の自動車や電車の音など…そう音の大きさをホンという単位であらわしますが0ホンというのはどれくらいの大きさでしょう。

やっとききとれるくらいの音を0ホンといい、この0ホンがもとになってその十倍の音を十ホン、百倍の音を百ホンという

人の会話は六十ホン、電車の音は八十五ホン、やかましい音が百ホン、百三十ホンをこえると耳が痛む。

当神社が弁天様であり、花隈花街に信仰者が多く、戦災を受けるまでは月金十銭也の掛金にて日参会を組織し毎月十五日に総拝祭を執行し、花隈では「中現長」の湯木吾一氏がこれの総代役で、もとの「播半」「治作」の主人等も世話役で「雀亭」の女将や髪結業の大西さん、芸者では照香・若延・吉弥・若葉・ゑみ香・まさ次・とみ枝・若司・千代子その他熱心な日参者が多く、祈年祭・例祭・秋祭・新嘗祭の各大祭にはそれ等の芸者衆が祭典後の直（なおらい）会宴の配膳や接待や後始末まで、無料奉仕をしてくれて賑やかなものだった。殊に新年祭の拝殿には芸者衆からの献供が並び壮観でもあった。

厳島神社復興造営奉賛会

奉賛会長　竹馬準之助

施工者　北神流宮大工　北野常吉

改修開始　昭和三十九年八月

竣工　昭和四十年六月

総工費　金六百五十万円

現在崇敬者責任役員

近藤槌夫　浜野吉男　芳地音次　左近田駒之助

桝田幸三

花岡山禅定院
福徳寺略縁起

住職　酒井立順

抑々当時の本尊十一面大悲の像は弘法大師一刀三礼の御作にて楠木正成公多年護身の尊像なり。

然るに建武三年五月二十五日、楠公兵庫湊川の辺にて自殺の折柄、この尊像霊験灼かにましますが故に、塵芥の内に廃し給い敵人の土足に穢し奉らん事を深く歎き給い、遙か山の麓を見給えば当所より三丁ほど戌亥に当りて深谷の間に小庵あり、是幸いと此所に大悲の尊像を納め給いて心静かに自殺し給いぬ。故に今に至りて此所を楠谷勝負の池と呼ぶ。

然るにこの尊像、当時に安置し奉る由来は、抑々当時華岡山禅定院福徳寺は人王八十三代土御門院の御宇、建久年中に九条の関白「禅定殿下兼実公」の御建立にて開山厭求上の開基なり。千時宗祖法然上人、土佐国より依而赦免に御帰洛の砌り、当国押辺の浜に御舟を寄せられ月輪殿下の御建立の因縁によって暫く当寺に寄宿ましまし、諸人勧化し給い貴賤老若市の如く集まり結縁を蒙る者その数を知らず。然るにその後歳霜星移りて大悲の因縁ましますが故にや、天正年中の頃、この尊像楠谷の小庵より当寺に移し奉る所、弘誓ちかい新たにして日々霊験盛なり。誠に薩埵は現当両益の誓い空しからず、福聚の海無量にして信心の輩願望成就せずという事なしと。

※本略縁起は徳川末期の板刷りにして板版縦横二面現存当寺にあり。

昭和廿七年春花隈城跡発掘墓石銘

一、天文四乙未十一月十八日逆修　為　道円禅門

二、天文八年乙亥逆修　為　宗椿禅門

三、天文廿二年彼岸日逆修　為　鳥宗国禅門
四、〃　〃　〃　為　妙弥禅尼
五、永禄十年七月廿二日　月仙　宗圓禅定門
六、永禄十年十月十日　宗相禅定門
七、宗本
八、八月時正　道吉禅門
九、外に一石五輪八個、中に二個側面に四角の穴あり背面に梵字を刻む

本発掘石塔部分総計八十五個

内訳

反花座　三四（内九個型式古し）
地輪　三九
宝筐印塔基礎　三
同　塔身　一
一石五輪　八

建武年間創建　吟松庵跡遺碑の銘
為　横坊増享菩提敬白（天文十）
以年七月吉日
二親二世安楽　上津……宗貞

福徳寺無縁塔前（古灯籠の台座銘）
為　持厳院殿光峯浄彦居士
明暦元己未臘月廿八日　菅　兵右衛門尉

昭和四十四年三月三十一日
花隈落城四〇〇年忌安置
一石五輪塔　二〇〇基（無縁）
（花隈城趾駐車場建設工事中発掘に係るもの）

※福徳寺の所在地は花隈町六九番地花隈中央本通りの中央東側にあり、別掲花隈城天主閣趾記念碑があり発掘の無縁仏の石塔が安置されている。

日本キリスト教団 神戸教会

神戸を中心とするこの周辺に及ぶキリスト教の宣教活動は医師であったベリー師による医療と西洋医学講義を通してなされたが、明治六年神戸元町五丁目にキリスト教書籍を販売する書店を設け、やがてその家で毎日曜日説教会を開くようになった。

当時宣教師のもとで求道した人々には旧三田藩士が多く、藩主九鬼隆義をはじめ開国進取の人物が集まり、洋学教育に力をつくし、新文明の摂取に積極的であり、開港の神戸のため活躍する者が多かった。

かくして、明治七年（一八七四）四月一九日グリーン宣教師を中心とする一一名の信徒によって摂津第一神戸キリスト公会と称する関西において最初、日本においては第三の新教のキリスト教会が創立され、今年九六周年を迎えたわけである。当教会最初の日本人牧師は松山高吉氏で聖書の日本語訳のため大きな貢献をなした。

その間、教会堂は明治一〇年（一八七七）北長狭通六丁目善福寺旧敷地に建てられ、次いで明治二一年（一八八八）現在の位置に移転、神戸の諸建築の中でも異色ある現教会堂は昭和七年（一九三二）新築された。

尚、神戸教会はキリスト教を人格形成の基礎として、創立当初より、学校教育に尽力、タルカット、ダッドレーの如き優れた宣教師に協力、今日の神戸女学院の前身である神戸英和女学校を明治八年（一八七五）に諏訪山の麓に設立、その後教会婦人会の奉仕によって明治二二年（一八八九）頌栄保姆伝習所（現在短期大学）と頌栄幼稚園を設立した。

その後昭和二九年（一九五四）教会付属いずみ幼稚園を開設するにいたった。かつて大東亜戦争中は軍の接収するところとなったが幸に戦災をまぬがれ、花隈の一角に謂わば神戸の精神の城として、大空高く聳え立っている。今後とも地域の方々の暖かい御理解のもとに、隣人に奉仕のできる教会でありたいと祈っている次第である。

現任牧師　児玉浩次郎記

（1970・7・1記）

史 花隈城と城主

荒木摂津守村重

荒尾親成

神戸にも天守閣やお堀を備えた城があった——と言っても、もうひとつピンとこないかも知れないが神戸のドマン中、今の県庁から絃歌さんざめく花隈花柳の巷は花隈（花熊）城の城跡なのである。

花隈城は今から四百二年の昔の永禄十年（西紀一五六七年）織田信長の命によって、荒木村重が一年がかりでこれを造り、やがて明智光秀の讒にあい、また村重の部下の失策によって、主人信長の激怒を買い、心ならずも信長に背くという運命にさらされ、天正八年（一五八〇年）七月二日池田信輝父子の攻略にあって苦戦の末落城焼失してしまった。

花隈城は寿命わずか十三年という短命のお城であったわけである。

現在の岡山池田家（元岡山藩主）の古記録によると、花隈城は本丸、二ノ丸、三ノ丸を備え、勿論天守閣や濠をもった城で、規模こそさほど大きくないが、いわゆるお城らしいお城であったらしいのである。

今これを現在の地形に当てはめてみると、北の境は市電山手線の通り筋、南は国鉄路線、東の境界は県庁、旧庁舎西の道路、西は下山手六、七丁目の間、その周囲は僅かに四町四方にも足らぬ平城ながら、南の斜面は相当きり立ったような崖で切岸七間と書いてあり、東も七間、北の岸四間とあるから相当高い城壁の上にあった城で、その上濠も記されているのでこんな姿そっくり、そのままで花隈城が残されていたなれば、それこそ神戸の観光資源の最大級のものになったであろうにと全く惜しい気がする。

註　当時の天守閣は現在の花隈町内福徳寺の位置にあったといわれている。

さて花隈城主荒木摂津守村重はなぜ主人の織田信長に背かなければならない運命を背負ったのであろうか—。

歴史の一頁をひもといて彼と花隈城の悲運を偲んでみるのも神戸人にとっては、とりわけ興味深いものを感ずるの

である。

戦国の英雄、織田信長の天下統一に最後の最後までつきまとった障害は実に本願寺一向宗一揆と称する一種の僧兵団の敵対であった。

天文五年（一五三六年）法華宗徒に焼かれ、京都に近い山科から大阪石山の地（今の大阪城）に本拠を移した。いわゆる石山本願寺一揆という名の僧兵達はその陣地の周辺に武力的な濠や石垣を構築し、熱心な門徒の市街を造って約三十余年間定着し、宗教的なそして封建領主的な地位をその門主に与え、その専制治下に統卒された武力的生活を営んでいた。

一方豪気果断、ヨーロッパ文明まで輸入し、切支丹の自由信仰をゆるし、その頃の新兵器、鉄砲の輸入、入手に成功して、その偉力にものを言わせて漸く全国統一の大事業を目指して勝ち進んできた信長の武力と思想は必然的に、この本願寺一揆の武力と正面衝突をまぬがれない運命となって現れ、かくして一勝一敗、その両者間の激突激闘は実に十一年の長きに渉ってつづけられ、その間信長は実に根気よく本願寺軍に味方をする武将を追って伊勢の長島、紀州の雑賀（さいが）から北陸道へと、つぎつぎに軍を進めていた一方、この本願寺一揆軍を支援してやまない長州の毛利氏はとりわけ信長にとって目の上のコブであり、強敵中の強敵としてさすがの信長も手をやいていた。

天正六年（一五七八年）になって信長が多年の努力と戦果により、いよいよ今の大阪城の地に石山本願寺軍を追いつめて攻略、いま一と息となった時、伊丹の有岡城に居た荒木村重がた部下の一部将がどうも本願寺軍に内通し、食糧攻めを受けている敵方に糧米等を送り込んでこれを助けているばかりか、更に一部の者は毛利勢に加担しているらしいとの情報が信長の耳に入ったからたまらない。

現に証人として村重の部下の数人は捕えられ拷問の結果、その事実を自白し、更に村重と仲の悪い明智光秀はこれをにくんで、さらに輪をかけて信長に有る事ない事まで讒訴に及んだので、信長の不信と激怒を買う結果となってしまった。

しかし、こうなっても村重と仲のよい秀吉や、細川幽斉などが相当にとりなし、信長の心を和らげようとしたが、遂に効を奏せず、村重もいよいよ腹をきめて播州三木城の別所長治（ながはる）兵庫区山田（神戸電鉄沿線）丹上山明要寺門徒僧兵とも結んで、本願寺軍側として旧主人信長

に反旗をひるがえす結果となってしまった。

× × × × ×

ところで花隈城の攻防戦は、今から丁度三八九年昔の天正八年（一五八〇年）閏（ウル）三月二日に開始され寄せ手の大将は池田信輝とその子輝政であった。神戸市内の今に残る生田の森、金剛寺山（現在の大倉山）諏訪山等がこの池田方の攻撃用陣地として利用され、激戦激闘が四ヵ月にも及び、時には池田信輝、輝政父子が自ら出撃して組み討ちで荒木軍部将を刺しその首級を挙げるというような白兵戦をしばしば山の手一帯や城の周辺で繰り拡げられ、花隈の城下町は兵火を蒙って焼き払われてしまったことが、当時の記録に残されている。

花隈城も籠城――苦戦につぐ苦戦を重ねたるも四ヵ月にして戦死傷者相つぎ激闘の末、今はこれまでと遂に天正八年七月二日落城、城主荒木村重等一部の者は一方の血路をひらいて僅かに脱出、兵庫の津より船で長州に落ちのび毛利軍に助けられた。

その後、織田信長が天正十年六月本能寺の変で明智光秀のために不慮の死を遂げるや、世の中はいくばくもせずして秀吉の天下となった。

秀吉は生き残った荒木村重の人材を惜しんでこれを許し、切支丹大名として有名な高山右近が、これまた旧友の情けで迎え入れ、堺の町で余生を送っていたが、天正十四年同地で病歿してその波乱の一生を終っている。

さて、不思議な後日物語りというか、甚だ興味深いエピソードが一つある。それは浮世絵画家の先駆者として有名な岩佐又兵衛（俗称どもの又平、岩佐又平）は、この荒木村重の実の子であり、また南蛮屏風や或は国宝豊国祭屏風の筆者として名高い狩野内膳一翁もまた、この荒木村重城将の遺児であるとのことである。

藤井貞幹（江戸時代の学者）の「好古目録」には「岩佐又兵衛父を荒木摂津守村重と云う。信長公に仕えて軍功あり、公これを賞して摂津国を与う。後、公の命に背く、又兵衛時に二歳乳母これを懐（ふところ）に入れて本願寺の子院に隠れ、母方の氏を借りて岩佐氏を称す。成人ののち信長の弟織田信雄に仕う、画図を好みて一家を成す。能く当時の風俗を写し、世人呼んで浮世又兵衛と云う、世に又平と呼ぶは誤り也」と記されている――し、南蛮屏風を描いた狩野内膳の伝記には「一翁内膳は元亀元年の出生、父は元来荒木村重の臣であったが、主家歿落後九歳の頃紀州根

来の蜜厳院に入り、のち画才を認められて狩野松栄の弟子と成ったと云う」との意味のことが記されている。

いずれの時代でも血醒い戦乱のあとには必ず平和を願い、文化が栄えるという。日本も太平洋戦争の苦しい経験を経ていま文化国家としてすくすくと育ちつつある――が。

天正の昔、花隈城の血醒い戦塵を僅かに脱出し得た幼い魂に、浮世絵の祖と仰がれ、世界の人々にまでかっさいをはくせる画人が誕生したということは、何を意味しているのであろうか。歴史は繰返すというが、省みて誠に興味深い感を覚えるものである。

☆筆者荒尾親成先生は、前神戸市立美術館・南蛮美術館の館長であり、幕末史・郷土史の研究家であります。昭和四十四年十月には「明治・大正の神戸の面影」という珍らしい、且つ貴重な写真集を発刊されております。その写真集の中に、花隈付近のものも掲載されております。

荒尾先生の文には関係なく、追記を書かして頂くと、先年花隈落城四〇〇年忌の法要をされた福田とよ女史は、城主荒木摂津守村重の従兄弟荒木志摩守安志の末裔である。

志摩守は一族と共に戦ったが、落城と共に毛利家をたより落ちのび、その子孫が代々九州の黒田家に仕え、千五百石を扶持されて明治維新を迎えたと系図に書かれている。

血統というか明治初年単身上京して、当時の美術大学に入り絵画を学ばれた女流画家であり、御主人は日本画の大家福田眉仙画伯（昭和三十八年十一月歿）であるのも「どもの又平」の話に関連して、くしき因縁ではあるまいか。

また、系図中徳川時代に荒木十郎ェ門という人があり、御承知の浅野内匠頭の切腹の際の介錯人として皆様に知られている人でもある。

（編集委員　吉川一雄）

夢かなった？ 新生「花隈城」

祖先の供養と喜ぶ 城主荒木家末えいの

眉仙画伯未亡人　福田とよ女史

荒れ果てたまま放置されていた神戸市生田区の「花隈城跡」に四月はじめに神戸市の手によってモータープールと噴水公園が完成、約四〇〇年ぶりに近代的な装いに変って再建される花隈城は、荒木摂津守村重によって築城されたといわれるが、この荒木家の末えいで、実現はしなかったが自分でも再建のプランを持ち〝現代の花隈城〟再建を「七十年間いだき続けた夢でした」と喜んでいる八十六才の老婦人がいる。

この人は芦屋市六麓荘に住む故福田眉仙画伯夫人とよさん。ともに花隈城を築城した荒木志摩守安志の二十代目の子孫にあたる。

花隈城は一五六七年（永禄十年）に織田信長が全国統一のため中国地方進出の足がかりとして、当時伊丹の有岡城々主荒木摂津守に命じて築城させた。だが築城十三年目の一五八〇年（天正八年）一向宗一揆にからんで信長の不信をかい、池田信輝父子の軍勢に攻められ落城、摂津守・志摩守ら武将は逃げのびたが、このときの攻防戦で婦女子約二五〇人が犠牲となった。

その後、城は解体され、その材石は池田勢の兵庫城（現在の兵庫区築島町付近）建築に使われた。城跡は田畑となり石垣その他の「城跡」を証明するものはいまはなく、花隈城跡の名だけが残る〝幻の城〟となった。

とよさんは八十六才のいまも元気で、気が向けば好きな絵筆を取ったり、眉仙画伯との思い出を中心にした〝自伝〟のペンを走らせている。

とよさんの〝お城再建の夢〟が芽ばえたのは今から七十

年前、小さいときから母いとさんの「荒木家の祖先は女子供を置き去りにして逃げた。そのために男が育たず苦労ばかりする」という昔話を聞いて育ち「自分が祖先供養をしなければ……。お城を再建しよう」……と決心したという。建築費の一部には、時価三千万円以上はするといわれる家宝同然の光悦筆の画や、宅地の一部を手放すつもりだった。

プランでは供養塔を持った五階建の城、一階は兵庫県物産館、二・三階は県下の絵画界発展のため、ギャラリーと若い画家の作品展示即売場、四階は名食店として、付近のサラリーマンに利用してもらい、利益は城の維持費に当てる。五階は茶席と城史料館を予定していた。

だが神戸市の〝城跡公園〟の青写真ができ、城再建の夢は消えたものの、とよさんは「どんな形であれ、立派にお城の名前が残されることは供養になります」と話しながらも「やっぱり、あそこにお城を作ればいいのにね」ともらし「夢」は捨て切れないようだ。

最近、このとよさんにすばらしいプレゼントがあった。こんなとよさんの夢を伝えきいた地元花隈自治会などから三十一日に花隈町の福徳寺で〝花隈城落城犠牲者供養〟をやろうという申し出があったのだ。とよさんは「長年の夢がかなえられました。当日は必ず出席させてもらいます」と大喜びで〝その日〟がくるのを楽しみに待っている。

（昭和四十四年三月二十五日・神戸新聞夕刊転載）

史　花隈城

花隈城は（花熊又鼻熊に作る）永禄十年織田信長の命に依りて、荒木摂津守村重に仰せ、家臣野口与一兵衛奉行として一ヶ年の内に此城を築く。其位置は現今の花隈町・北長狭通・下山手通等の地に亘れり。大手口は東面せり。維新の頃生田馬場先より鯉川までを大手町と呼びたりしは、此城の大手口なればなり。搦手は城ヶ口と宇治野との二方面に在り。現今港務局の地（現在の花隈公園）は旧名高城と呼びし地にて城の天主台なりという。又再度山中より流れる水、中宮より花隈の東を経て神戸村に注ぐ。其間長籔と称せし所断崖となりて城の東部を擁し険要の地となる。此水の一部を城内に引きて用水となしたるものの如し。

又御所坂は治承四年四月三日安徳天皇遷都御上陸の地、又花熊に宇治大納言の花亭あり、遷都行幸の前夜は此所に一宿せられたり。

福徳寺の山号を花岡山ということ徴すべし。

此地は西国に対する咽喉なるを以て信長此に築かしめたり。天亀元年荒木村重の男志摩守村正之を預り天正三年まで居城す。志摩守故えありて密に芸州毛利家へ通じて、大阪石山本願寺へ加わり兵糧を運送し、之を丹生山に送り蓄え三木の別所氏と共に事を挙げんとするを以て、信長大いに怒り村重の臣野口与一兵衛に仰せて戦かはしめたるも、利なくして遂に野口は討死せしにより、雑賀孫市城代として三年間此城に拠りて降らず、勢い頗る猖獗なりき。時しも池田信輝父子来りて塁を北野城ケ口、諏訪山、阪本生田の森の南五ヶ所に構えて之を攻めしが、天正八年七月二日終に落城せり。而して此時の戦いは頗る悲惨を極めたるものの如し。

花隈落城の後、池田信輝は此津の領守となるや花隈の城を毀ち、其石材を以て兵庫に築く。爾後の沿革詳かならざれども池田氏の他方に転封せしにより兵庫の城も廃城に及びしならん。

〈付　記〉

花隈城趾より出でし輪塔

花隈町兵庫県港務部の庭前に輪塔あり。これは明治三十四年四月中港務部の時報球を花隈町字高城の地に建設せんとする際、地下六尺（約一・八米）を掘りしに其の底より此塔露はる。塔は原形の儘に非ずして、塔形の不具なるは尚地に埋没せる証なり。現在塔の高さ三尺余梵字あれど磨滅せり。維新前までは此高城の地に一大樹ありて、其辺荆棘蓬々狐狸の巣窟たりしかば、白昼だにも婦人小児は近づかざりしと。惟うに此塔は天正当時の戦死者菩提のために建てしものに非ざるか。

（明治四十四年十一月三日出版西摂大観下巻より転載）

花隈落城四〇〇年忌

浜野吉男

花隈城が信長の手の者に攻め亡ぼされた時の犠牲者を供養した法要の記録を書けといわれましたので、馴れぬ心許なさで責任上ペンを執りましたが、それよりもどんなことからそれを行なったかといったいきさつをお話させて頂いた方がと勝手な判断を致しました。

大げさな表現ですが、「人生はドラマ」とか「奇縁」とか申しますが、私は本当にそうだと信じます。物心のついた時から六十才を数えようとする今、無学ながら今日では色々な思い出と共に郷土神戸の歴史を多少とも知り得たと思うようになりましたが、正直に言って終戦後この花隈に移りました当時は、ただ花街として有名だった処という印象だけでありました。

強いていえば花隈城については、巷間よく耳にする「戸沢山城守」とか「塚原卜伝」の名前と共に幻の城ぐらいにしか考えていなかったのであります。

今から考えてみると、時代も何も理屈に合わずおかしいと判りましたが、これは昔の「立川文庫」などに面白く書かれていたという小説などの影響ではないかと思います。

さてそんな私が先年来、実在されていた旧城主一族の遠祖の方と巡り合い交りを頂いて、果ては四〇〇年の昔を偲んで当時の物故者の霊を慰めようとする催しに、主催者の一人になろうとは夢にも想像も出来なかったことであり、皆様のおかげでその光栄を与えられたものと、今でも当日の盛儀の模様が念頭にまざまざと浮かびます。

大東亜戦争で焼土と化した花隈の街も一応の形態を備えた感じがしますが、ここ数年前までの私達が「ドン山」と呼んでいた城跡が現在のように立派になるまでには、町内周辺にも色々な道路整備の工事がありました。その上新下水とか地下鉄の工事のように相当地面を深く掘り下げたものもあります。

その間に合せて二百数十基に及ぶ石碑が出土したのであります。素人の私達ですからすぐに戦死者の墓ではないか

と早合点を致しまして、史談会の先生方を迎えて調査して頂いたこともありました。その結果知り得たことは室町時代以降のもので婦人の墓も交っているとか、花隈築城の永禄十年を五十年も遡上る頃のものと聞かされました。

とに角市よりも相談を受けていましたし、私達土地に住む者の感情からしても放置出来ず、町内福徳寺の住職にお願いして一たんお祀りして頂いたのであります。

話が代りまして現在の花隈公園に添って西へ僅か数十米の個所に、昔から有名だった「冨貴楼」というお茶屋さんがあります。正確にいって北長狭通六丁目、池田はるさん（八十六才）ここの庭内からもずい分沢山の石碑が出たもので、当時新聞紙上にも大きく取上げられたものですが、私の聞いた処では、それは一部分でまだまだもっと掘れば七割方も残っているでしょうとのこと、気持が悪いので中止してもらったと話されて、私には場合によっては調査を続けさせてもいいと申し出でられましたのが、そのままとなっております。その「冨貴楼」に戦前からよくゆうれいが出るという話も詳しく聞きました。うそか真か話を話として聞いて頂きましょう。

お女将さんの話では、毎夜の如く白髪の上品な武家風の女性のゆうれいが出てこわおました。新聞には出るわ、お客さんは面白半分でその部屋に泊まらせという物好きな人も後をたたず、使用人もみなこわがったものです――と。それで色々と手をつくし、人の話も聞いて調べたところ、思い当るふしもありまして今では出ません――と私もいつかつり込まれて女将の一代記を拝聴する羽目となりま

したが。

冨貴楼こと池田はるさんの本家筋に当る先祖は岩出屋といって、西宮市で二百五十年から続いた大地主の旧家であったこと、備前岡山の池田侯、即ち信長の命で荒木一族を花隈に討ち亡ぼした武将と姓も家紋も同じで、何かのつながりがその昔あったかも知れない点、そして現在も毎朝欠かさずバケツ一杯のお茶湯を屋敷の周囲にまいて拝むのを日課の一つとしていられることは、花隈にちかしい人なら周知の事実であります。

こうした二つの状況のもとに私達が石碑の安置について何かを計画せねばとの念願をもつに至りました折も折、料亭「阿らい」へ日本画の大家福田眉仙先生が依頼によってある方の肖像を画きに通われていられたある日、フト「私の家内の先祖は荒木志摩守」との一言を洩らされたのです。

そして池田はるさんと福田とよさんが先祖からの恩讐を越えて、手をとり合ってお互いに詫びあった出合いもありました。福田とよさんの別項の御挨拶にもある通り七十年来の執念というかそれもありましたが、福田眉仙先生歿して六年やっと宿願叶い天下晴れてとよさんの夢の一部が現実化したのがこの法要であったのであります。

時は昭和四十四年三月三十一日。

町内の東南の一角では五億六千五百万円の巨費をかけた花隈公園兼花隈駐車場の完成を祝う目出度い式典(市主催)を挙行されたその同じ日、中心にある福徳寺において「花隈落城物故者四〇〇年忌慰霊大法要」が執り行なわれたのであります。当日は県市関係官庁はもとより幾多市内の知名の方々を初め花隈に常々深い関心を抱いて下さる大ぜいの人の心からなる集まりとなりました。

無縁仏の石碑や五輪塔二〇〇基も安住の地を花隈城天守閣跡地の由緒ある福徳寺の境内に求められ、安らかになられたことは何にも勝る喜びであります。

私は法要の式の順序など、しかつめらしい記録を残さずとも、当日心溢るるばかりの参列者の方々に頂いた式辞の数々ですべて事足りると信じております。

最後にこの盛大なる法要の執行に当りまして、万端の準備をして頂いた方々、また恙がなく終了させて頂きました関係者の皆々様方に心より感謝を捧げます。

表白（四百年祭墓前にて）

本花隈古城は一五七五年織田信長天下を統一するやその臣荒木摂津守村重に命じ、村重は野口与兵衛をして之を築かしむ。その石材は「近江の国より運ぶ」とは花隈落城記に伝う。

今その地域を遺物よりその境界を推考するに、東は神戸幼稚園もとの谷筋、西は掖済会、南は省線元町駅の浜側、北は下山手通四丁目の新道路に当る。

古図によると城内の東には侍、足軽の二町、今繊維街と称す。もとのドン山高城坂をはさんで福徳寺境の西側が一般町民の住居並立す、三ヶ町共に各々濠を以て之を囲む。福徳寺境内はその城郭の中心たり、現地あちこちの石垣の遺跡は古城をしのぶに足らん。町の中心を流るる河水は再度谷口一里にて西方に落し宇治川に合流せしむ。

之、宇治川は恐らくは河下を止め、西方よりの敵を防ぐ水濠と為すの謀よりにあらざるか。

古城は平城として安土城に次ぐ由緒ある築城にして火薬の伝来により築城法の一変せしもの周囲に石垣を以て畳みそれを濠をもって囲む、本城は東西六〇〇米、南北四〇〇米、面積二四ヘクタール。

戦記によると、大半は現「いさみ」の辺の水路に於て敵兵数騎と短槍を以て争い首をはね持ち帰るとか、かくの如くしてこの地は内乱の度毎に血なまぐさく且つ住民は戦毎に兵火にかかり命を落とせしもの数知れず、当城は勿論伊丹、尼崎、根来の勢、池田の兵今茲にその有縁、無縁の霊を追福するに施食の供を以てす。それ追善の行事は他の動物社会には之を見ず、吾等人間社会に於てのみ特権なり。

今有縁、無縁の霊位吾等が善根功徳を受け迷いを転じて成仏し、四百年忌に際し紫雲蓮台に座し而して永遠に微笑し、施主を始め吾が町並に各家庭の隆栄を祈念し給えかし。

願わくばこの功徳を以て一切に施し共に安楽国に往生せしめ給え。

維時昭和四十四年三月三十一日

華岡山主

四十五代正僧正信誉立順

花隈城四百年記念法要につき

因縁の深きを今更に思いめぐらして

旧姓荒木　福田とよ（号瀾月）

◁新春の書初めをする筆者

昨昭和四十四年二月私の邸に花隈町会長浜野吉男氏、副会長吉川一雄氏の御二方が初めて御光来になって「今年は花隈落城後三百八十七年ですが取越して四百年の法要を営みたいのですが、貴女は昔の城主荒木家の血縁と聞きましたのでこの法要の施主になって頂きたい」と実に意外な光栄のお話を承って私は誠に嬉しかった。

その昔は小さいながらも一城の主としていたのが武運つたなく織田氏と戦って惨敗し、一族郎党は悲惨な運命となり、城主志摩守は京都嵯峨に、伊丹の村重は兵庫から広島の毛利家をたよって落ちのびた後、堺に来て利久の門人となって茶道に世を過したとの事である。志摩守の四男は黒田長政の家臣となって三百数十年間筑前に住みついた、その末裔の一人が私である。少女時代祖父宗保や母からざっと以上の事など聞いていたのでした。

今こそかく落魄の生活であるが、昔は是々で相当の家筋であるから貧乏ではあるが、決してはしたない振舞をしてはならぬぞよと口ぐせのように聞きました。

十六才の正月十日四十二才になった父が病歿、私は病気になやむ同年の母と十二才の妹をかかえて小学校を出たばかりの少女には実に途方にくれたのではありますが、裁縫

の賃仕事の間には和文習字を小金丸先生に、茶道を黒田家茶道指南であった藤野先生に、漢字、そろばんを隣家の老人に習っておりましたが十七才の春福岡に初めて電話局が設立されたので、母は「此処に奉職したら家賃位はまとまって頂けるから試験を受けなさい」とすすめた。

常々荒木家の末裔々々とほこらがましく云っていたのに電話の交換手にまで落ちぶれるとは何たることかと私は心中なさけない思いであるが時世時節致し方がない。試験を受けて合格したので仕方なく毎日通勤、何番々々の仕事である。

この十七才の局勤めの時代、私の胸に初めて昔の事が勃然と浮んだ。それは数百年の間、相当の知行を黒田家から頂き、まず中以上の生活であったらしいが、彼の悲惨なる最後をされた花隈多数の霊魂の慰霊法要らしい事をしていないようである。無念に敗北死をした縁故者をなぜ同情の心を持ってなぐさめてあげなかったか、吾が家の不運つづきはこれではないかと、ふと私一人心中に考えが起ったのである。

自分の手によって得た僅かな日給ではあるが、いざ之より寺に四季の読経を御依頼して花隈城下の慰霊読経をしようと決心した。

それから実は若松での代用教員、上京後の悪戦苦闘中も僅かではあったが昨年まで続けていた。

然し花隈花街は仲々貧乏人ではよりつけぬ処と耳にしていたのであったが、計らずも十数年前福田印刷会社々長の肖像を「夫」眉仙に依頼があって眉仙は「阿らい」さん（料亭）に福田さんの肖像のスケッチに行った。その際眉仙の口から私の祖先の事を一寸もらしたそうで、之を「阿らい」さんの女将から聞かれた浜野氏等が私に施主の事を申し入れに御光来になったのであります。

私はかつて幸田露伴先生から霊魂不滅の御高説を承った事がある。今回私が十七才の春に感じて思い立ち七十年に亘るまだ見ぬ花隈であったが、霊魂はチャンと知っていて浜野氏等と同様の誠意の方々に依頼したのではないかと愚考するのである。

我今や八十七才、眉仙に苦闘を見出され、その後押し役五十七年であった。金銭には縁のない人間であるが、彼の四百年大法要の費用は眉仙の作品四点で賄って下さった。仏の御指図か芸術の力を私は実に愉快に思われてならぬ。